



克己

道は天地自然の道なるゆえ、
構学の道は敬天愛人を目的とし、
身を修するは、克己を以って終始せよ

平成 21 年 12 月 20 日発行 第 2 号
編集・発行：北海道南洲会広報部会

北海道南洲会機関紙

北海道南洲会・第 3 回集会の開催 会長 工藤 勉

北海道南洲会・第 3 回集会は、11 月 16 日、苫小牧市在住の金井塚健志氏の初参加により開催されました。金井塚氏は業務多忙のなか駆けつけてくれました。

当日の検討課題は「入会基準について」でした。本件は本会発足段階からの懸案事項ゆえこれまでも議論を重ねてきました。

本会は西郷南洲翁の信条のごとく「来るもの拒まず」の姿勢を基本としておりますが、他方において「組織防衛の根幹にかかわる」重要事項です。慎重な議論は至極当然といえましょう。

当日は「会員の推薦を基に役員会にて協議する」ことで一応の結論を出す事ができました。

今後、多くの西郷南洲翁ファンの入会を期待するところであります。

結論が出たあとは和気藹々の雰囲気の中、料理、お酒に舌鼓をうちながら話はつきませんでした。

金井塚氏も初参加とは思えない程とけ込んでくれました。南洲翁を慕う気持ちは皆同じです。南洲翁の求心力が私たち会員相互の信頼・尊敬を増幅してくれるのかもしれない。

会の後半は工藤作成のレジュメによる「西郷南洲翁遺訓第 2 条」の解説に移りました。

少々(?)お酒が体内を循環しているなかでの勉強会ではありましたが、これまでの柔らかな雰囲気が一変した感がありました。

詳細に関しましては本号以下にて天沼会計幹事が内容をまとめましたので、ご参照いただけましたら幸いです。

「西郷南洲翁遺訓第 2 条」は国家及び企業などの組織のリーダー - にとって不可欠な資質が述べられております。

古今東西、例外なく当てはまる内容であります。昨今の政治状況、企業組織の有様の表層部分のみをながめるだけでも「なるほど。南洲翁が語られた内容はまさに今の世の中を言い表わしている」と驚嘆せざるをえません。

重要なことは本遺訓を私たち会員が十分に理解し自身の業務・毎日の生活の中で実践していく事です。

規約の改正

【現行】

第 5 条（入会と脱会）

- 1 会員は、第 2 条の目的に賛同し、かつ、既会員の推薦を得た者とする。
- 2 脱会は、会員の意志に基づく。

ただし、役員会において、会員の行為が本会の目的を著しく逸脱し、本会の運営に支障を及ぼす等と判断した場合は、当該会員に脱会を勧告する。

【改正】

第 5 条（入会と脱会）

- 1 正会員は、第 2 条の目的に賛同し、かつ、既会員 1 名以上の推薦を受け、役員会の承認を得た者とする。
- 2 賛助会員は、第 2 条の目的に賛同し、本会の運営に協力する者で、役員会の承認を得た者とする。
- 3 脱会は、会員の意志に基づく。

ただし、役員会において、会員の行為が本会の目的を著しく逸脱し、本会の運営に支障を及ぼす等と判断した場合は、当該会員に脱会を勧告する。

西郷南洲翁遺訓を学ぶ（第2回）



西郷南洲翁は明治10年に、かつて自らが命がけで作上げた明治政府に対して国旗を翻しました。政府が、旧武士階級をあまりにも過酷に扱ったために、政府を怨嗟する声が巷に満ち、南洲翁の決起を待望するそんな中、弟子である私学校生徒の暴発により、自分の意思とは裏腹に、反乱軍の長として担がれるままに、一切の言い訳をせず、戦塵の中に斃れたのです。

無私無欲の中に信義を貫いた南洲翁。

今日の日本人が忘れてしまった美德を一身に背負った人とも云える西郷南洲翁が遺してくれた言葉の集大成がこの西郷南洲翁遺訓です。

北海道南洲会は、翁の遺訓を通して、その精神を学んでいきます

遺訓 弐

賢人百官を総べ、政権一途に帰し、一格の国体定制無ければ、縦令人材を登用し、言路を開き、衆説を容るるとも、取捨方向無く、事業雑駁にして成功有るべからず。昨日出でし命令の、今日忽ち引き易ふると云様なるも、皆統括する所一ならずして、施政の方針一定せざるの致す所也。

組織の指導者は部下に対し、明確な方針とそれをやり抜く確固たる決意を示さなければならない。

例えば、立派な政治家がいたとしても、多くの役人に対し、自分の施政方針とそれをやり抜く決意を広く知らしめて、政権を一つの体制にまとめなければ、いくら優秀な人材を登用し、多くの意見を取りいれようとしても、どの意見を採用し、どれを不採用とするのか、正しい取捨選択ができないだろう。

それが、政治を混乱させ、何をやっても粗雑な結果となり、やがては大きな失敗を招くのだ。

組織の指導者が、昨日は一方から勧められて出した指示を、今日は他方から苦情が持ち込まれると、今度は全く別の指示を出したり、部下が指示を求めても、明確な回答を出さずに責任逃れに終始するとなどと云うことも、その指導者が明確な方針とそれをやり抜く決意を持っていないからに他ならない。

こんな指導者は、組織を徐々に衰退させてしまうだけなのだ

組織のあるべき姿と組織の指導者の心構え

会計幹事 天沼 宇雄

南洲翁の遺訓第2条は、組織の指導者の理想像、組織のあるべき姿を示している。

組織管理は、組織の指導者による組織理念の全構成員への徹底からはじまると言われる。

組織の指導者が部下に対して明確な方針、すなわち組織理念を伝え、それを最後までやり抜く決意を示すこと、そして、それに対するぶれない姿勢をその組織の中で維持し続けることが重要なのである。

そうすれば組織理念は組織の物差しとして機能し、組織内で不適切な行動が発生することはない。

もちろん組織理念が、安易に目先の効率性や効果にとらわれず、組織の長期的発展を目指していることは欠かせないが、それ以上に組織の指導者の資質は重要なのである。

組織の長たる者が、理念やビジョン、戦略をしっかりと部下に伝え、それを一切ぶれずに遂行できた場合には、組織の構成員が組織目標を共有し、その組織と共に成長を実感でき、やり甲斐、生き甲斐を感じてがんばることができ、さらには組織のモラルも容易に維持できるのである。

組織とは本来、その理念が組織の末端まで伝わり、組織全体がその理念に沿って動くものであり、その組織全体を

一つの意志ある集団として動かしている基本的な力は、ヒエラルキーではなく、むしろ組織構成員の求心力としての指導者そのものなのである。

つまり組織の指導者の言葉を組織の構成員全員が共通認識として持つためには、指導者が一貫した価値観で組織運営をしていくことが必要不可欠で、そこには指導者の強い使命感、覚悟、信念の存在は必要不可欠であり、純粋に組織に忠誠を誓う人を見抜く能力と、世の中の流れを的確に読み解く能力も合わせて兼ね備えていることが重要である。

前に行く道がせつかく開けていても、指導者がその道を進む勇気と決断力を持たず、そこから常に逃げているようでは、部下についてはこないし、当然組織も先には進めない。

そうした指導者としての意識の欠如が組織運営に対する組織内の理解を不統一にし、組織行動の意味が末端の構成員にまで連続性をもって理解されなくなり、やがてさまざまな誤解や逸脱を生じさせ、笛吹けど踊らずの組織へと墮落していくことになる。

この遺訓第2条は、「組織の指導者たる者は、人を見ぬく能力、そして世の中の流れを読み解く能力を本来兼ね備え、不断の研究を欠かさず、自己研鑽に励み、そして、その組織の方針に沿って最後までやり抜く強い意志と決意を持った人間であるべきであり、それが組織の発展のためには欠かせないことなのだ」と説いているのではないだろうか。

西郷南洲翁の生涯を辿る（その二）

1853年（嘉永5）アメリカ東インド艦隊司令長官のペリーが浦賀に来航し、幕府に対し、その武力を背景とした高圧的な開国要求を行った。そして、ペリーに続いて、ロシアのプチャーチンが長崎に来航し、開港通商を要求した。

しかし、江戸幕府第3代将軍徳川家光以来、鎖国を国是としてきた幕府は、諸外国の外圧に対し、確固たる方針も対策もなく、その場しのぎの対応をとり、諸外国の侮りをかうばかりだった。そして、翌1854年（安政元）幕府は、アメリカと「日米和親条約」を締結したのを皮切りに、ロシア、イギリス、オランダといった諸外国との間に、半ば強制的に和親条約を締結させられたのだった。

薩摩藩主島津斉彬^{しまづなりあきら}は、幕府の弱腰外交に対し、国防の充実が急務であると建言し、また、諸大名の中で聡明かつ英邁の呼び声の高かった一橋慶喜^{ひとつばしよしのぶ}（後の徳川慶喜）を将軍の座に就かせて、国難を打開すべく、老中阿部正弘や土佐藩主山内豊信（後の容堂）らのいわゆる一橋派（注1）と運動を開始した。

しかし、一方では徳川御三家の紀州藩主で、当時13歳の徳川慶福^{とくがわよしとみ}（後の徳川家茂^{いえもち}）を将軍に推そうとする一派があり、その中心人物が紀州藩付家老^{みずのただなか}（注2）水野忠央だった。

水野は、御三家の血筋から紀州藩の方が上とする論を展開するとともに、大奥の声も味方に付け、そして、幕僚を画策し、当時彦根藩主だった井伊直弼^{い い なおすけ}を大老（注3）の座に就けた。

大老となり強大な権力者となった井伊直弼は、将軍継嗣問題について、強引に徳川慶福に内定させるとともに、朝廷の勅許も得ないまま「日米通商条約」を無断調印することを決定した。

将軍継嗣問題に敗れた島津斉彬などの一橋派は、条約の違勅調印を理由に一齐に立ち上がり、「尊王」と「攘夷」は、ここに「尊王攘夷」論として結合し、これは反幕の合言葉ともなった。

斉彬は、井伊の強権政治に対し、薩摩から兵を率いて京に上り、朝廷から幕府改革の勅許を受ける計画を立て、薩摩で兵の訓練を開始した。

西郷南洲翁は、1852年（嘉永5）父母の勧めで伊集院兼寛の姉須賀（または敏子）と結婚したが、この

年に、父吉兵衛、母マサを相次いで亡くし、一人で一家を支えていかなければならなかった。

1854年（安政元）藩への上書が藩主島津斉彬に認められ、斉彬に従って江戸に赴き、庭方役となって、当代随一と謳われた開明派大名の藩主斉彬から直接教えを乞う日々を送った。

また、この頃、南洲翁は、全国の志士たちから絶大な信望を集めていた水戸藩の藤田東湖（注4）の元を訪れ、その学識、胆力、そして、人柄や態度に深い感銘を受け、生涯尊敬の念を持ち続けるに至った。

翌年（1855年（安政2））には、越前藩士橋本左内（注5）が来訪して、国事について話し合い、翁は、その博識に驚いて尊敬の念を抱き、共に国事に奔走することとなった。



藤田 東湖



橋本 左内

しかし、故郷薩摩では、西郷家の貧窮にあえぐ暮らしぶりを見かねた妻の実家の伊集院家が、須賀を引き取ってしまい、以後、二弟の吉二郎が一家の面倒をみることとなった。南洲翁は、この弟の吉二郎を、以後は兄と思って敬うと云って感謝したのだった。

1858年（安政5）薩摩藩主島津斉彬の命を受けた南洲翁は、京都清水寺成就院住職の僧月照（注6）や橋本左内らの同志とともに、一橋慶喜の將軍擁立に向けて、朝廷の内勅降下を図ったが失敗に終わっていた。

そして、そんな折、島津斉彬は、薩摩で兵を訓練中、俄かに発熱して病状が悪化し、その8日後の7月16日に急逝してしまう。

斉彬の死因は、当時日本で流行していたコレラという説が有力であるが、その余りに急な死は、斉彬の嫡子がいずれも夭逝していることとも併せ、父斉興、異母弟久光、そして、お由羅（前藩主島津斉興の側室）やその支持者の陰謀であるとの噂があり、おそらく南洲翁は、この噂を信じたことだろう。

師と仰ぎ、神とも崇める藩主斉彬の死は、南洲翁を絶望の淵に追い込んだ。

南洲翁は、国許に帰り、斉彬の墓前で切腹することを覚悟したが、その時、僧月照が、南洲翁を諷めたのだった。「西郷はん、今、斉彬公の後を追って死んだとて、斉彬公が『吉之助、よくやった』をお褒めなさるとお思いか。いや、斉彬公は、『吉之助、何故私の志を継いで働こうとしないのだ』と烈火の如くお怒りになるのではありはしまいか。西郷はん、斉彬公は何をなされようとおいでじゃった、ここはとくとお考えなされ。」



月照の言葉は南洲翁の心を揺さぶった。言葉を詰まらせ、俯いた南洲翁の大きな目から涙がこぼれおち、膝を濡らした。「おいが間違っておいもした・・・」南洲翁は、声を振りしぼって、そうい、斉彬の遺志を継ぐことを固く心に誓ったのであった。

もしも、月照のこの諷めがなかったならば、南洲翁は言葉どおりに切腹して果て、今日にその巨声を残すことはなかったかもしれない。

しかし、時を同じくして、大老井伊直弼は、尊王攘夷派や一橋派に対する徹底的な弾圧を開始していた。大名、公卿や志士ら150人以上が、死罪、謹慎、永蟄居などに処せられた「安政の大獄（注7）」と云われる事件である。

幕府の捕吏の手は、月照の身にも確実に伸びていた。

南洲翁は、月照を薩摩で匿おうと、京を脱出し、月照の身柄を筑前博多に住む同志の薩摩藩士北条右門に預けると、月照の薩摩入りの下工作をするため、単身薩摩に戻るのだが、その間にも京都奉行所支配の目明し二人が博多に潜入していたのだった。

月照の身の危険を感じた北条は、月照を一刻も早く薩摩入りさせたいと思ったが、月照一人では到底薩摩入りがかなうはずもない。そんな時に、筑前の勤皇志士平野國臣(注8)が北条を訪ねてやってきたのだった。

北条は、平野に事情をすべて話し、月照の供をして薩摩入りしてくれるように頼むと、「ようござす。行きましょう」と、平野は二つ返事で引き受けた。

当時の薩摩藩は、一藩にあって鎖国を行っていたかの如く、関所の警備は厳重を極め、関所手形もなく、幕府に追われている月照の供を引き受けるのは、正に命がけと云えるものであった。

北条の依頼を受けた平野は、月照の潜む大庭村に向い、身支度を整えて薩摩に向かった。平野の知恵と勇気で数々の困難を乗り越え、薩摩にたどり着いたが、関所では当然入国を拒否される。

しかし、平野は諦めない。舟を雇って、航海の難所と云われる「黒の瀬戸」を呼ばれる海峡を、真夜中に渡りきり、薩摩入りを果たしたのだった。



先に薩摩に帰った南洲翁は、四方八方手を尽くし、藩の要職に月照の保護を求めたのだったが、斉彬の没後、藩の実権を握っていた前藩主の島津斉興は、幕府のとがめを恐れ、南洲翁に月照らを藩外に追放するよう命じたのだった。

藩の外に出れば、月照は幕吏によって捕縛され、万に一つも命はない。月照は死を覚悟した。

南洲翁は、斉彬公が生きていればと齒がみしたが、藩士として藩令に背くことはできず、また、共に命がけで働いた月照を見捨てることなどできるはずもない。

平野國臣

南洲翁は、月照と平野とともに絶望のうちに、一路日向の国に向けて錦江湾の海に舟を出した。そして、南洲翁は、月照とともに寒中の海に身を投げたのである。事態に絶望した南洲翁と月照とが相図った心中だった。

平野が水音に気づき、周りを見ると、南洲翁と月照の姿が見えない。船頭に急ぎ舟を止めさせ、必死に二人を探し回ったが、その姿は見えない。懸命に搜索し、そして、数刻経った頃、突然二人の姿が海面に浮き上がってきた。平野は、急遽浜辺に上陸し、二人を蘇生させるべく、必死に介抱したのだった。

しかし、月照はそのまま帰らぬ人となってしまったが、天はここでも南洲翁を死なせはしなかった。翁は一人、奇跡的に一命を取り留めたのである。

しかし、この出来事は、南洲翁を苦しみ抜かせることになる。

月照、享年 46 歳。そして、南洲翁 31 歳のときのことであった。

(注1) 一橋派 (ひとつばしは)

13 代将軍徳川家定の継嗣問題について、一橋徳川家の当主徳川慶喜 (後の 15 代将軍) を推した一派。実父の前水戸藩主徳川斉昭 (烈公) を始めに、実兄の水戸藩主徳川慶篤、越前藩主松平慶永、尾張藩主徳川慶勝などの親藩大名や、開明的思想で知られた外様大名である薩摩藩主島津斉彬、宇和島藩主伊達宗城、土佐藩主山内豊信らがいた。

(注2) 付家老 (御付家老)

江戸時代、幕府が親藩 (徳川直系一門及び分家) に対し、また本藩が支藩に対し、施政を監督・指導す

るため遣わした家老。

(注3) 大老

政務を総括し、将軍を補佐する最高官。しかし、任ずべき人が居ない場合は置かなかった。老中の上にあって職務を処決し、将軍といえども決裁を動かすことはできなかった。

(注4) 藤田東湖

水戸藩の政治家であり水戸学藤田派の学者。藩主水戸斉昭から最も信頼を受け、民政や武備や学校建設など藩政改革の全般にわたって力を尽くした。ペリーの来航後は、斉昭とともに一橋徳川家の当主一橋慶喜の将軍擁立などの国事にも奔走し、全国の志士の信望を集めたが、安政の大地震で圧死した。享年 50 歳。

(注5) 橋本左内

福井藩士で幕末の志士。大坂、江戸では洋学、医学を学び、藩主松平慶永に認められて藩学明道館の幹事となり、藩政改革に手腕を振った。しかし、将軍継嗣問題で一橋派として活動し、安政の大獄で牢舎に囚われ、処刑された。享年 26 才。

(注6) 月照

京都の清水寺成就院の住職で尊王攘夷派の僧。ペリー来航後住職を弟に譲り、国事に奔走する。一橋派として活動し、幕吏に追われ、薩摩に渡るが、藩に入れられず西郷南洲翁とともに錦江湾に身を投げた。享年 46 歳。

(注7) 安政の大獄

日米修好通商条約勅許反対、紀州徳川慶福の将軍継嗣反対で結集した水戸藩、一橋系大名と尊攘志士群の猛運動に対し、大老井伊直弼が決行した大弾圧。1858 年（安政 5）9 月から京都、江戸、水戸で逮捕されたもの計 150 余人に達した。翌 1859 年（安政 6）8 月から断罪が進み、斬首 8 人、別に 40 人に上る遠島、追放等の中から獄死者が続出した。

(注8) 平野國臣

福岡藩士。攘夷派志士として奔走し、西郷南洲翁や清河八郎ら志士と親交をもち、討幕論を広めた。島津久光の上洛に併せて挙兵を謀るが寺田屋事件で投獄される。出獄後、討幕のため、大和国での天誅組の挙兵に呼応する形で但馬国生野で挙兵するが、またも失敗に終わり捕えられる。京都所司代の六角獄舎に入れられていたが、禁門の変の際に生じた火災を口実に処刑された。享年 37 歳。

平野は歌人としても知られ、有名な「我が胸の 燃ゆる想いに比ぶれば 煙はうすし 桜島山」という歌は、この平野の作と云われる。

北から南から - サムライたちの声 -

敵陣営からも称賛される南洲翁

札幌市 小川美奈登様

まずは、北海道南洲会のご発会、心よりお祝い申し上げます。

そして、私がごとき賊の一兵卒にまでご配慮いただき、改めて感謝申し上げます。

（注：「賊」とは現政権のことではありません。あくまでも佐幕を騙るという・・・）

さて、克己創刊号、謹んで拝見いたしました。再生紙に白黒の・・・と思いきや、何と端正な出来栄えでしょう。まるで世間に流布する歴史雑誌のような重厚さと文章の確かさを感じました。

南洲会会員の皆様の熱意が伝わってまいりました。

南洲翁の威名と至誠は万人の知るところ、いまさら、何ら異論はございません。

その私心なきは、当時、他の維新高官の驕りに比して、奇跡のようであると言わざるを得ません。

「(前略)故に何程国家に勲勞ある共、その職に任せぬ人を官職を以て賞するは善からぬこと」(以上、克己P2から引用)とは、正に至言であります。

しかしながら、この後、歴史は時間の経過とともに、何ら勲勞なくとも、陸大や東大を出ることで、職に耐えざる地位や権力を得る輩が輩出することとなっていきます。

司馬遼太郎のように、明治が全て善く、昭和が全て悪であるとは思いませんが、先の大戦における陸軍参謀(例えば辻政信や瀬島龍三)がごときに比べれば、山縣なんぞは戦場に臨んでいる分、まだマシであると思ってしまうのです。

南洲翁の奇跡的出現は、その歴史上の役割を終え、近代史のひとコマとなります。その歴史上の役割は、そう、戦国期の織田信長と同様、【革命】の一言に尽きるでしょうか。

そして、革命家の宿命でしょうか、翁が発するその時々々の権力者の耳の痛いことも面倒なことも遠く近代史の彼方に追いやられてしまいました。

そして、今日、教師は人生を語れず、役人は国家を語れず……。

残念ついでに佐幕派である私は会津戦争の顛末なども残念でなりません。

私は西郷隆盛という人物を尊敬するものでありますが、官軍は総じて好きになれません。それは各種派遣軍の参謀や隊長連の中には、有象無象が少なからずおり、これにより各地で悲劇が拡大したと知っているからです。

例えば、奥羽鎮撫総督府の世良修蔵、また、小栗上野介に有無を言わず斬首した原某(後の北海道開発長官、貴族院議員)などです。

今風に言えば、国益を損する行為というのでしょうか。

ああ、翁の偉大は、これらの恥知らずにも寛容であったのでしょうか。

この点、仮に翁に【限界】があったとして、また、仮にいつか紙面で触れることでもあれば、是非ご教示願う次第であります。

恥を忍んで、縷々書き続けてまいりましたが、どうか、軽輩の戯言とご容赦ください。

恥かきついでに、あと少しお付き合いを願います。

フランスの文人アンドレ・マルローは、わが国の特攻隊を評してこう述べたといひます。

「母や姉や妻の生命が危険にさらされているとき、生への執着を捨て、自分が殺られると承知で暴漢に立ち向かうのが、息子の、弟の、夫の道である。世の中で最も偉大なこととは、代償を求めない純粋な行為である。」

ああ、やんぬるかな。郷土の若者ととともに散華せる西郷先生の人生たるや、正にこの言葉に尽きるのでは、と秋の夜長、勝手に感慨に耽ったのであります。

北海道南洲会の設立に寄せて

福岡県 鮫島 弘充様

ブログの中で西郷さんのことを書き始めて約2年位になりますが、いわゆる論評ではなく、私のイメージの中に生きている西郷さんが行動したり、モノを言っているわけです。

西郷さんを始めとする薩摩武士は、篠原冬一郎(國幹)などは特にですが、本当に無口なのです。

また、西郷さんは顔写真すら現存せず、名前も実際は「隆永」なのだが、政府の書記官が「りゅうえい」を「りゅうせい」と聞き間違えて「隆盛」と書き記したのを「ヨカ」と言って、そのままにしておいた人なので、色々あっても気にならなかったんですね。

たとえば、「征韓論」にしても西郷さんは「遣韓論」者であったわけですが、己の主張に固執することな

く、世間から誤解されても弁解するわけでもなく、あっさり邦（くに）へ帰ってしまった。

新政府では「参議・陸軍大将」という官職を拝命していたのですが、彼自身は農本主義者で一介の農夫を目指していたんですね。

だけど、みんなから担ぎあげられてしまい、その思いとは裏腹に戊辰戦争から東北戦争、西南戦争と戦（いくさ）に明け暮れたんですね。

だから、その実像は深い霧の中だと言っても過言ではないと私は思うのです。

ナニがあっても彼の両の巨眼は人をいつくしみながらも、いつも天をみつめ、地をながめ、すべてを彼の大きいハラの中に納めていったんです。

「天はこれを敬えども恃（たの）まず、人はこれを愛（いつく）しめども、疎（おろそ）かにせず」の気概を保っていた。

その気概を自らも保つことができれば、こういう場面では西郷さんならこういうように考えて行動しただろうと想定できるんですね。

昨今はまったく死語となってしまいましたが、古来中国でも日本でも武人の血の底流にあるもの、生き方の（言い換えれば死に方の）根幹をなすものは「義」の一字だと私は思うのです。

西郷さんは天に対する義に生き、義に死んだ。西郷を囲む者たちは西郷に対する義に生き、死んでいった。

功利というものは一片もない。

この潔さが我々を引きつけて離さないんです。

近世の薩摩人の人生哲学を形成した「郷中教育」と西郷思想の復活が待望されています。

この北海道南州会が独り北海道にとどまらず、日本とアジアの人々との節義ある繁栄の標（しるべ）となることを期待します。

「克己」読後感 ワカサリゾート(株)常務取締役 若狭 幸司様

北海道南州会の機関紙、じっくり読ませていただきました。

一言で言うと今時こんなに純粋な人たちがいたのかと感銘を受けました。

最近、仕事に追われた政治を批判している自分が情けなくなりました。

西郷さん始めまだまだ十分に理解しておりません。

機会があれば勉強してみたいと思います。

読後感まで。

南洲翁と禅

会長 工藤 勉

西郷先生の幼少時に関する文献は決して多くはありません。裕福ではない家庭に生まれ育った西郷先生は母親から「貧乏生活は恥ずかしいことではない。貧乏に負けることが恥ずべきこと」と言い聞かされていました。西郷先生の父親は薩摩藩の勘定方小頭(会計係主任)でしたが両親、妻そして7名の子供を養うことは困難であったため本職のかたわら島津日置家の雑事を手伝い副収入を得ていました。母親もまた家計の足しにと他家の着物を縫って収入を得ていたのです。明治維新樹立後、明治政府の重鎮として君臨していた頃も質素を旨とされていたのは母親の躰が影響していたのかもしれない。

西郷先生が青年期に貧困と戦う日々の中で熱中していたことが座禅でした。座禅修業によって自分の心身を練磨されたのでしょう。後年の思い切りの良さですとか腹の据わり方はこの当時の座禅修業が寄与していると私は考えております。事実、幼なじみでもあり西郷先生と共に禅修業を行った大久保利通は「吉之助さん(西郷先生の幼名)は禅を極めたせいか思い切りが良すぎて困る。」と嘆いたそうです。禅修業により悟りを開いていた西郷先生は自己の信念に反すると役職を捨てて鹿児島にプイと帰ってしまう癖(?)がありました。

西郷先生が禅修業された場所が今も鹿児島市内に残っております。私は昨年(平成 20 年)にその地を訪問しました。名称は呼んで字の如く「座禅石公園」(誓光寺跡)です。住所は草牟田(そうむた)といいまして観光ガイドマップには殆ど掲載されておらず判りにくい場所に位置しております。それゆえ私は事前に鹿児島市在住で大学時代の後輩(鹿児島市議会議員)に道順を教えてもらい、確認しながら車をゆっくりと走らせました。



当時、西郷先生は加治屋町の自宅からこの地まで片道徒歩 30 分以上を要して通われたのです。誓光寺・住職の無参和尚は大きな石の上で座禅修業する西郷先生たちをほほえましく眺めておられたそうです。その石は現在も残されております。私も靴を脱ぎこの石の上で座禅を組みましたがすぐに足に痛みを感じるほど硬かったことを今も覚えております。



敬

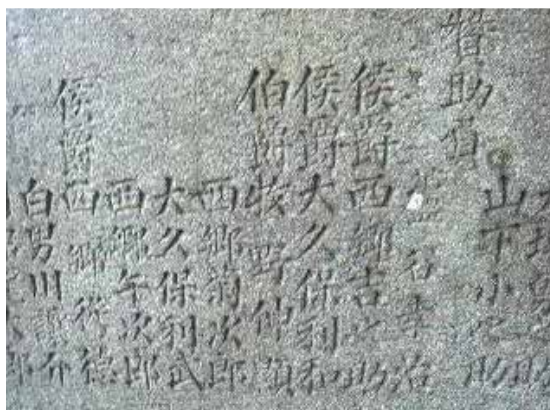


人

この石が若き西郷青年を鍛え上げた座禅石です。



「篤姫」でも登場した二人の盟友関係はここでも垣間見ることができます。(因みに南洲は西郷先生を指し甲東は大久保を指します。)



参考文献:「敬天愛人第 8 号」

私が毎年、訪鹿する時期はもちろん 9 月で、日にちは 24 日であります。(西郷先生の命日です)私が住む札幌市はこの頃になると涼しい気候になります。朝晩は半袖で外出すると寒いくらいです。

しかし 9 月下旬の鹿児島の気候は北海道人にとって「ただただ暑い」としか感じません。いきおい冷たい飲み物を欲してしまいます。



私が暑さ対策と糖分補給のため必ず立ち寄りのお店が天文館(鹿児島市の繁華街)にある「むじゃき」さんです。このかき氷は私の好物なのです。もちろん地元の方々から愛されているのは当然です。

このかき氷は類似品が多く全国のス - パ - でもカップ入りで販売されています。「しろくま」という名称で有名ですね。でも本家本元は鹿児島県の「むじゃき」さんなのです。

お店入口前ではシンボルのシロクマ君が出迎えてくれます。本店では何と 10 種類以上ものかき氷を注文することが出来るのですが、私はいつもオ - ソドックスな氷白熊を注文しています。

この氷白熊はいわゆるかき氷とは異なり、氷のキメが細かく口に含んだ瞬間、すぐに溶けてしまいます。氷が雪の様に柔らかくシロップ(練乳)が甘いので甘党にとっては病み付きになってしまいます。おまけに量が多いのも特徴です。氷白熊の器の直径は 20cm 近くあります。

鹿児島県出身の芸能人も鼻屑にしているこの「むじゃき」さんのかき氷を機会がありましたら皆様もお試しになってはいかがでしょうか？

敬天愛人



ウチんとこの半次郎どんと北海道南洲会

副会長 高木 良一

ひょんなことから、工藤会長の知己を得て、この「北海道南洲会」の設立に関わりましたが、実のところ、西郷南洲翁については、工藤会長ほどの深い造詣は持ち合わせてはおりません。

しかし、私は、南洲翁に見出され、幕末維新の動乱を駆け抜け、華のように散り去った中村半次郎、後の桐野利秋に魅かれるところが大きく、この「北海道南洲会」において、半次郎どんが師とも父とも兄とも敬い慕った南洲翁について学ぶことは大きな意義のあることなのです。

ウチんとこの半次郎どんは、1838 年(天保 9) 鹿児島郡吉野村実方で城下士中村与右衛門の第三子として生まれますが、10 歳の頃、父が徳之島に流罪になり、家禄五石の扶持さえも召し上げられ、さらには、18 歳の時に兄が病没。以後、小作や開墾畑などで働き、家計を支える生活を送ります。

半次郎どんは、貧窮の中、農民同様の生活の中で育ち、系統的な学問をする機会はありませんでした。

剣術も多くは独力で鍛え上げたもので、立木を木刀で一日八千回打ちつけるという苛烈な日課を己れに課し、径三、四寸の樹木はことごとく打ち折るという修行を続け、その技は達人の域に至り、雨粒が軒から地

面に落ちるまでの間に三度抜刀して鞘に納めたという逸話があります。

^{からいもざむらい}唐芋侍と蔑まされても、「今にみちよれ」と己れに打ち勝ち、自らの人生を切り拓いていく。こんな半次郎どんこそ、本紙「克己」にふさわしい男ではなからうかと思ってしまうのです。



西郷南洲翁に見出された半次郎どんは、1862年(文久2)京に上り、諸藩の志士と交際し、やがて、藩の重臣に重用され、以後は、南洲翁の懐刀として、幕末動乱の炎の中にその身を置くこととなります。

1868年(明治元年)の戊辰戦争では、南洲翁が東征大総督府下参謀として東海道先鋒隊を率いて東上したときには、半次郎どんは城下一番隊隊長。上野の彰義隊との戦いでは、南洲翁の指揮下で黒門口に参戦。

その後、南洲翁の推挙により、大総督府直属の軍監に任じられ、会津藩降伏の後の開城の式では、官軍の軍監として、会津若松城の受け取りを務めます。

半次郎どんは、明治新政府になってからは、陸軍少将に昇進し、1872年(明治5)に熊本鎮台司令長官に任命され、1873年(明治6)陸軍裁判所所長に転任しますが、西郷南洲翁が、俗に云う征韓論争で下野すると、役職を未練なく捨て、即刻辞表を提出して鹿児島に帰ります。

そして、南洲翁暗殺計画が明るみになったことや私学校生徒の火薬庫襲撃事件が勃発したことなどから、私学校関係者の大評議を半次郎どんが主導し、「政府に尋問の筋あり」として、南洲翁が大軍を率いて北上することとなります。世に云う西南戦争の始まりです。

半次郎どんは、西郷軍四番大隊指揮長兼総司令として進軍しますが、あなどっていた熊本鎮台の守りは堅く、これを破れず。田原坂の戦い、延岡和田越の戦いと敗戦を続け、そして、鹿児島に戻ります。

しかし、この間、政府軍は、着々と軍を進め、西郷軍がこもっていた城山を包囲し、遂に政府軍が総攻撃を開始。西郷南洲翁が被弾し、別府晋介の介錯で自決したのを見届けた半次郎どんは、さらに進軍して壘にこもって勇戦しますが、額を撃ち抜かれて・・・即死。

半次郎どんは、時代を一直線に駆け抜けたようなその激烈な人生に幕を閉じたのです。享年40歳でした。

人斬り半次郎の異名をとった半次郎どんは、根っからの木強者^{ぼっけもん}で、戦国時代の薩摩隼人のような武人でした。そして、爽やかな男であり、人情の男でした。泣き上戸のあだ名があって、生けどりにした捕虜を尋問するとき、その覚悟のほどを聞くと、しきりに感動して落涙するのが常であったと云います。

戊辰戦争で降伏した会津藩の城を受け取る際には、会津藩主始め君臣の降伏の態度を見て、その昔、主家島津家の祖先である義弘父子が秀吉に降伏した時も、その心中は、今の会津藩主と同様のものだっただろうと、声を放って泣いたと云うのです。

私は、半次郎どんのこんな場面を想像するだけで、胸に熱いものが込み上げてきて堪らない・・・。

半次郎どんは、南洲翁にどんな想いをもって付き従っていたのでしょうか。半次郎どんの晩年の言葉です。「俺は何からな^{おい}にまで南洲翁に同意するというわけではなく、そういうことはできぬ。しかし、かといって翁と別れることもできぬのは、俺という男は死ぬべき場所に死ぬことができぬ奴だからである。俺を死ぬべき場所で死なせてくれる人は南洲翁しかなく、そのため翁とは一生離れることはできぬのだ」

こんな半次郎どんを始め、篠原國幹、村田新八、別府晋介などなど数多^{あまた}の薩摩隼人の心を、「西郷南洲翁遺訓」を編纂した庄内藩の人々の心を、そして、現代もなお、多くの人々の心を捉えて離さない南洲翁について学んでいく「北海道南洲会」に参画できたこと。また、志を同じくする同志とも云える仲間^{やっ}に巡り合えたことは、私の人生にとって大きな収穫と云えるのです。

西郷南洲翁関係年表

西暦号	南洲翁年表	国内の動き	世界の動き
1828 文政 10	12月7日、鹿児島城下の下加治屋町山之口馬場で、父吉兵衛九郎隆盛、母満佐(マサ)の長男として生まれる。幼名小吉(こきち)。	1805: 幕府が北辺警備を強化 1818: イギリス人コンドルが浦賀にきて通商を求める。 1821: 伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図完成」。 1825: 幕府が異国船打ち払い令を出す。	1804: フランス、ナポレオン皇帝即位、ナポレオン法典の公布。 1819: イギリス、シンガポールを占領。
1833 天保 4	6歳。松本各覚兵衛について儒学を学び始める。 次弟吉二郎生まれる。	1833: 天保の大飢饉が始まる。 1834: 米価の高騰により全国で一揆や打ちこわしが勃発。	1823: アメリカ、モンロー宣言。 1830: フランス、7月革命。 ベルギー、独立宣言。
1839 天保 10	12歳。友人と争い、右肘を負傷。以後、武術よりも学問に励むようになる。	1837: 大塩平八郎の乱 1838: 緒方洪庵が大坂に適々斎塾を開く。	1837: イギリス、ビクトリア女王即位。
1843 天保 14	16歳。三弟信吾(後の西郷従道)生まれる。	1842: 水野忠邦が天保改革令。幕府、異国舟打ち払い礼を廃止し、薪水食料給与令を制定。	1840: 清、イギリス間のアヘン戦争始まる。
1844 弘化元	17歳。藩の郡方書役助となり、吉之助と称す。	1845: 長崎に英艦が入港し、測量と薪水を要求。	1842: 清がイギリスと南京条約を締結し、香港を割譲。 1846: アメリカ東インド艦隊が浦賀に来航し、国交を求めるが、幕府は拒否。
1847 弘化 4	20歳。四弟小兵衛生まれる。このころ下加屋町郷中の二才頭(にせがしら)となる。	1851: 島津斉彬、薩摩藩主となる。 1853: アメリカのペリーが浦賀に来航。 : 日米和親条約	1848: フランスで二月革命、ドイツで三月革命。 : アメリカでゴールドラッシュ
1850 嘉永 3	23歳。陽明学を伊藤茂右衛門に、禅学を無参禅師に学ぶ。 父吉兵衛が御用人を務めていた赤山鞠負(ゆきえ)お由羅騒動に連座したとして責めを負い切腹(享年28歳)。	1854: ロシアのプチャーチンが長崎に来航。 : 日露和親条約	1853: クリミア戦争勃発。
1852 嘉永 5	25歳。伊集院兼寛の姉と結婚。 父吉兵衛死去。亡父の跡目を相続。母マサ死去。	1854: ペリ - 浦賀に再来。 日米和親条約締結。 日露和親条約調印。 日英和親条約締結。	1856: 清・アロ - 戦争。(~1860)
1854 安政元	26歳。江戸にて庭方役に任命される。水戸の藤田東湖に会い深い感銘を受ける。 妻、留守中に実家へ帰り離婚する。	1855: 安政の大地震。藤田東湖圧死。 1856: 吉田松陰が松下村塾を開く。	
1855 安政 2	27歳。下加治屋町の家屋敷を売る。	1858: 井伊直弼が大老になる。 フランスとの修好通商条件に調印する。	1858: インドがイギリスの直轄地となる。 1859: イタリア統一戦争が起こる。
1856 安政 3	28歳。吉兵衛と改名。斉彬公の密書を徳川斉昭へ届ける。篤姫の輿入れ準備に奔走する。	1859: 神奈川・長崎・箱館を開港する。 安政の大獄。(橋本佐内、吉田松陰が死刑になる)	イギリスのダ・ウインが「種の起源」を著す。
1857 安政 4	29歳。藩主斉彬公に従って帰国。 4月、小姓与に復帰。 10月、江戸勤務を命ぜられる。	1860: 桜田門外の変。(井伊直弼暗殺)	1860: リンカーンがアメリカの大統領になる。 英、仏連合軍が北京を占領する。(北京条約を結ぶ)
1858 安政 5	30歳。6月、帰藩して斉彬に關東の情勢を報告。 7月、吉井友実と上洛。 大阪で斉彬公の訃報に接し殉死を考えるが僧月照に諫められる。 9月、月照を匿うため有村俊斎と共に帰藩の途につく。 11月、大崎鼻沖で月照と共に入水。 西郷は蘇生したが月照は死去。 12月、菊地源吾と変名。奄美大島の竜郷へ潜居を命ぜられる。	1861: 水戸藩士らがイギリス公使を襲撃する(高輪東禅寺) 孝明天皇の妹・和宮様が將軍・徳川家茂に降嫁す。	1861: アメリカで南北戦争が起こる。
1859 安政 6	31歳。大島竜郷着。愛加那(あいかの)と結婚。		
1861 文久元	33歳。菊次郎誕生。新家屋落成。 藩より召還命令を受ける。竜郷出帆。		

敬天愛人